世界名作劇場

プリンセス

小公女セーラ

『魔法のはじまり』

第36話

提供 ハウス食品工業

制作 日本アニメーション
フジテレビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第36話「魔法のはじまり」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ピーター
モーリー
ジェームス
アーメンガード
ロッティ
（ラビニア）
（ジェシー）

（ガートルード）

クリスフォード

ラム・ダス

召使A

召使B

エミリー（人形）

シーザー（猫）

メルの一家（ネズミ）

ボリス（アフガン犬）

ハリジャン（インド猿）

1

スクエア広場・全景

秋風に——パラパラと散る枯葉。

すっかり葉を落した木々の向うに——

×　×　×

ミンチン女学院と並ぶクリスフォード家の建物が見え

——近づく。

2

クリスフォード家・表

——その居間の窓が拡大して、

クリスフォードの重々しい声がかぶる。

3

同・居間

クリスフォード「ラム・ダス……」

燃える暖炉の火——車椅子のクリスフォードと、脇に控えるボリス。

クリスフォード「では、お前の話していた、隣りの屋根裏に住む少女とかに、なにかよくない事が起っていると云うのだね」

前に、ハリジャンを肩にのせて、心配そうに頷くラム・ダス——

ラム・ダス「はい、御主人様……なにしろ、この所、買物に出る姿も見かけませんし…」

クリスフォード「ふむ……」

ラム・ダス「元気なら、あの屋根裏部屋の窓から、笑顔を見せる筈なのでございます」

クリスフォード「病気か」

ラム・ダス「（頷く）大体、あの少女は、ひどい扱いを受けすぎています……ベッドは粗末ですし、寝る時間もない程働

かされている様です……体をこわさない方が不思議かも知れません」

クリスフォード「お前は、その少女が、ただのメイドではないようだと云っていたね」

ラム・ダス「はい……言葉づかいと云い、気品と云い正にその通りです……ベッキーと云うメイドも、あの少女を、お嬢様と呼んでいる程で」

クリスフォード「ふむ、なにか事情がある少女なのだろう……様子を見てやりたいものだが……」

クリスフォード、ふっと思いつく。

クリスフォード「ラム・ダス……」

ラム・ダス「は……?」

クリスフォード「私に代って、その少女の様子を見て来る事は出来ないだろうか」

ラム・ダス「（微笑）私も、その事を考えておりました」

クリスフォード「無論、誰にも気づかれぬようにだ」
ラム・ダス、微笑で頷いてみせる。
ラム・ダス「十分に、心得ております」
クリスフォードも、微笑で頷く。
クリスフォード「頼むぞ、ラム・ダス」
ラム・ダス、微笑で頷く――
ラム・ダス「では……」
肩のハリジャンをそっと床におろすと、静かに出て行く――

4 同・裏屋根

屋根裏部屋の窓が開き、ラム・ダスが現われる――窓辺に身を乗り出すと、一瞬、――

5 ミンチン女学院・裏屋根

――に、飛び移る。

音もなく天窓に忍び寄り、見おろす。

× × ×

――ベッドとセーラの脇にベッキーの姿。

6 同・屋根裏部屋

眠っているセーラの胸に、そっと毛布をかけ直すベッキー――

ベッキー「では、お嬢様、また御様子を見に参りますから……」

傍の洗面桶を取ると、出て行く――

7 同・屋根の上

茫然と見おろすラム・ダス、はっと気がつくと、斜面を棟の方へと昇る。

その明り取り窓から見おろすラム・ダス。

×　　×　　×

眼下に――三階廊下に立つミンチンとアメリアの姿が見える。

8　同・三階廊下

ハンカチを手に、焦々と待っているミンチンと、傍にアメリア――

屋根裏部屋へのドアが開き、洗面桶を手にしたベッキーが出て来る。

ミンチン、ハンカチを口にあて、近づく。

ミンチン「それで……どうなんです、容態は」

ベッキー「は、はい……それが、眠り病みたいに、ずっと眠ったままで……」

顔を見合せるミンチンとアメリア――

アメリア「お、お姉様……」

ミンチン、焦々とハンカチを握りしめて、

ミンチン「（吐き出す）な、なんて事です。あの娘、ここで死ぬつもりなんだわ……」

9 同・階段の上り口

心配そうに窺っているロッテイ、アーメンガードたち――

ロッテイ「（囁く）ね、アーメンガード……セーラ・ママは死んじゃうの？」

アーメンガード「そんな……そんな事ないと思うわ……だけど……」

だけど……」

ロッテイ「嫌よ、嫌よ……セーラ・ママが死んじゃうなんて……（泣く）」

アーメンガード「（泣顔）泣かないで、ロッテイ……私だって……私だって、どうしていいか判らないのよ」

その背后に——顔を見合せて冷笑するラビニア、ジェシー、ガートルード。

10 同・三階廊下

焦々と歩き廻るミンチン——

ミンチン「アメリア……！」

アメリア「は、はい、お姉様……」

ミンチン「このまま、あの娘が、屋根裏部屋で死んで、この学校から、葬式を出さねばならないようになったら、どうなる

と思います」

アメリア「そ、そんな……私には……」

ベッキーも、茫然と見るばかり。

ミンチン「恐ろしい病気で、死人を出した学校……そんな評判が拡がるのは、火を見るより明らかです」

アメリア「は、はい……」

ミンチン「断じて、表沙汰にしてはなりません」

アメリア「は、はい……」

ミンチン「或いは、あの娘が死ぬ前に、どこかの慈善病院へ移してしまう事も、考えておくべきです……判りましたね」

アメリア「は、はい、お姉様……」

ミンチン、ふっと階段口の方を見る。

× × ×

階段口に——覗っているアーメンガード、ロッテイたちの顔、顔、顔。

ミンチン「な、なにをしているんです。早く教室へお戻りなさい！」

×　　×　　×

×　　×　　×

ぱっと階下へ逃げる女生徒たち――

そのあとから、追い立てるように続くミンチンと――

アメリア。

×　　×　　×

取り残されて立尽したベッキー、背后の屋根裏部屋へのドアを心配気に振返る。

ベッキー「お嬢様……」

その頭上高く――明り取り窓の一角からそっと窺っているラム・ダスの姿。

気づかないベッキー、後髪引かれる思いで階段を降りて行く――

11　同　屋根の上

明り取り窓から窺っていたラム・ダス、そっと屋根裏部屋の天窓の方へ移る――

12　同・屋根裏部屋

――死んだように眠っているセーラ。

×　　×　　×

壁穴から出て来て、心配そうにベッドを見上げるメルの一家――ふっと気配に、天窓の方を見上げる。

×　　×　　×

天窓が音もなく開き、現われたラム・ダスの姿が、一瞬、鮮かに宙を飛んで、猫のように床に降り立つ――

×　　×　　×

驚いて、一斉に壁穴に飛び込むメルの一家——

×　　×　　×

降り立ったラム・ダス、ベッドのセーラを見守ったが、

足音を消し、そっと近寄る——

×　　×　　×

怪訝に壁穴から顔を出して見るメルの一家——

×　　×　　×

ラム・ダス、ベッド脇に膝を折ると、そっと手を伸ばし、セーラの顔の上数センチに掌をかざして、熱を確かめる（額に手をあてない）。

マットに触れ、硬さを確かめる。

ふっと——セーラが無意識に身動きする。

はっと手を引くラム・ダス——

枕許に——開いて立てられていたセーラの父母の写真立てが、ゆっくりと倒れ、ベッドから落ちそうになる。

一瞬、ぱっと宙に受け止めるラム・ダス、その写真立てを、そっとセーラの枕辺に戻す。

息を殺して立上るラム・ダス、一歩二歩後退し、改めて部屋の中を見廻す。

――火の燃えていない暖炉。

ラム・ダス、眼を移す――

――椅子に掛けられた儘の湿った普段着。

ラム・ダス、近づくと、そっとその服を摑んでみる――

一滴、二滴、したたる水滴。

ラム・ダス、撫然と手を離す――

ふと、椅子の上に置かれた薬瓶に気づく。

手にとり、蓋を取って匂いを嗅ぐ――薬の種類を嗅ぎ取ったのか、独り頷き、薬瓶をもとに戻す。

×　　×　　×

怪訝に見守っている壁穴のメルー家――

13

同・台所

入って来るジェームスとモリー。

ジェームス「やれやれ、えれえ事になっちまったぜ……死ぬ前に、どこかの慈善病院に抛り込めって云われたって、そう簡単に引受けてくれる所なんて、なかろうによ」

モリー「全く、厄介な話だよ……院長先生には内緒だけど、こりゃ、お葬い屋さんを手配しといた方が早いかも知れないね」

一方で、茫然と聞いているベッキー。

ジェームス「な、なんでえ。まだ、そんな所でウロウロしてやがったのか」

モリー「セーラがあの通りなんだ。お前が代りに買出しに行って来るんだよ！」

ベッキー「は、はい、ただいま……」

14 同・表

買物籠を提げて、使用人階段を上って来るベッキー――
心配気に、屋根を振りあおぐ。
ベッキー「お嬢様……」
泣けそうになるのを耐えて、買物への道へ踏み出す――

15 同・屋根裏部屋

部屋を見廻すラム・ダス――指呼点検のように指をさす。
――暖炉の上。
――セーラのいるベッド。
――床。
机等々――

頷くと一歩二歩後退し、飜えると鮮かに跳躍して天窓に飛びつくと、その儘サーカスのように躍り上って、屋根に出る。

音もなく閉められる天窓——

× × ×

壁穴から出て来て、怪訝に天窓の方を見上げるメルの一家——

× × ×

——セーラは昏々と眠り続けている。

16 コベント・ガーデン市場の一角

沈痛に腕を組むピーターと、ベッキー。

ピーター「畜生……こんな時に、俺がお嬢様の傍にいてあげられないなんて……」

ベッキー「（泣顔）ピーター……もしよ……もし、お嬢様に万一の
事があったら、私、一体どうしたらいいか……」
ピーター「ベッキー……そんな事云うのはまだ早いぜ。さ、お嬢さ
んの為に、二人でお祈りに行くんだ！」
ベッキー「えッ……」

17 セント・ポール寺院・全景

――鳴り響く鐘の音。

18 同・内部

一角に――祈り続けるピーターとベッキーの姿がある。

19 クリスフォード家・居間

クリスフォードの前に、ラム・ダス——

クリスフォード「では、私に、隣りの屋根裏の少女を救う事が出来ると……」

ラム・ダス「はい……あの少女に、今必要なのは、暖かい部屋と、暖かいベッドと、暖かい食事と……そして、暖かい隣人からの救援だと存じますので……」

クリスフォード「(領く)では、お前に任せよう……だが、一人で出来るのかね」

ラム・ダス、微笑で背后を振返る——

入って来る二人のインド人召使い、叩頭。

クリスフォード「(微笑)成程……では、ラム・ダス、成功を祈るぞ」

ラム・ダス、微笑で領いてみせる——

——C・M——

20 ミンチン女学院・全景（夜）

窓明りが、一つ一つ消えて行く——

21 同・地下の洗い場（夜）

皿を洗っているベッキー、看病疲れからか、コックリコックリしはじめる。

入って来るモリーとジエームス——

モリー「ベッキー！……また居眠りなんかして！」

はっと我にかえるベッキー——

ベッキー「は、はい、ただいま……」

慌てて皿を洗いはじめる——

ジエームス「フフ、早く寝たきゃ、それだけ早く仕事を片附けろって事よ、判ったな」

ベッキー「は、はい……」

　ジェームスとモリー、笑いながら出て行く——

　眠さを耐え、懸命に皿を洗うベッキー。

22　同・三階の廊下（夜）

　暗い階段を——眠そうな顔をしたベッキーが、手燭を手に上って来る。

23　同・屋根裏部屋（夜）

　扉が開き——そっと入って来るベッキー。

　ベッドに近づくと、セーラの額に手をあててみる——

　その手を引くと、今度は自分の額にあてて確める。

ベッキー「よかった……熱は、下ったみたいだわ」

そっとセーラの毛布をかけ直すと、

ベッキー「では、灯りはここに置いときますから……なにかあったら、呼んで下さいましね」

——静かに眠っているセーラ。

ベッキー「では、おやすみなさいまし、お嬢様……」

ベッキー、立上ると、そっと出て行く。

×　　×　　×

ふと、頭上の天窓が音もなく開き、ラム・ダスがヒラリと床に飛び降りて来る。

ベッドのセーラを確め、そっと隣室との壁に耳を寄せる——

24

同・ベッキーの部屋（夜）

ベッドで、胸に十字を切るベッキー。

ベッキー「神様がお嬢様をお救い下さいますよう……」
祈り終る――耐えていた眠気が襲い、思わず両手を拡げて大あくびする。
次の瞬間、仰向けに倒れ、忽ちイビキと共に眠りに陥入る――

25 同・屋根裏部屋（夜）

微笑で壁を離れるラム・ダス、天窓に向って合図――忽ち、天窓から降りて来る巻きジュータン――ラム・ダス、受取ると、素早く床に転がし拡げる。
――真紅の豪華なジュータン。
続いて、天窓から音もなく飛び降りて来る石炭バケツを手にした若いインド人召使い――暖炉に行くとマッチに火をつけ、附木を燃やしはじめる。

その間に——次々に天窓から降りて来る美しいテーブル掛、暖かそうな毛布、インド風の壁掛け。
ラム・ダス、次々に受取るとジュータンに置く——

26 同・屋根の上（夜）

天窓から、火のついた銀の燭台を入れるインド人の老召使——続いて、銀の食器類を窓下におろす。

27 同・ベッキーの部屋（夜）

依前、高イビキで眠っているベッキー。

28 同・屋根の上（夜）

天窓からの灯りに、明々と照された老召使いが、下に向って、完了の合図をする。
忽ち、下から飛び上って天窓を脱け出て来る若いインド人召使——
続いて、ラム・ダス——
ラム・ダス、二人に、（行け……）と合図する——
二人の召使、頷いて、隣家の屋根の方へ去る——
ラム・ダス、振返ると、そっと明りの洩れる天窓の下を見直す——

29	眠っているセーラの顔（夜）

ゆらぐ炎の反映に、赤々と色づいて浮び上っている。
ふっと、その眼がまたたき、開く——

セーラのM「ああ……私……随分、眠っていたんだわ……」

×　　×　　×

セーラの手が、そっと額にあてられる。

セーラのM「熱も、下ったみたい……」

ふと、気がついたセーラ、胸許の毛布を持ち上げる――

普段とは違う暖かそうな立派な毛布が眼に入る。

30　同・屋根裏部屋（夜）

はっとベッドに起上るセーラ、見廻して愕然と息を呑む――

×　　×　　×

燃えさかる暖炉の火――新しく持込まれた炉棚には、ピカピカの真チュウの湯沸しがシュンシュンと音を立て、暖炉の上には、美しいインド風の壁掛け。

机には、美しいテーブル掛けが掛けられ、その上には、

大きな銀の盆に乗った食器類が並んでいる。

× × ×

茫然と見るセーラ——思わず呟く。

セーラ「私……夢を見ているんだわ……」

誘われるようにベッドからおろした足許には、可愛い部屋ばきが揃えてある。

セーラ、無意識に突っかけ、美しいジュータンの上に立つ——

そっと暖炉に近づき、湯沸しに手をさしのべる——

セーラ「熱ッ……」

思わず手を引っこめ、呟く——

セーラ「夢ではないんだわ……でも、一体誰が……」

セーラ、暖炉の上の壁掛を見る——インド模様。

セーラ、はっと天窓を見る。

× × ×

――素早く屋根の上で身を引くラム・ダス。

× × ×

見上げたセーラ、ジッと考える――テーブル掛けの掛った机に行く。

銀の大盆に並んだ食器の中央に――大きな銀の蓋物。

セーラ、そっと蓋を取る――

湧き上る湯気――その中においしそうなスープが入れられている。

セーラ「まあ、おいしそうなクリーム・スープ……」

セーラ、はっと気がつく――

セーラ「そうだわ、ベッキーを呼んであげなくては……」

セーラ、ふらつく足でドアへ――

31

同・ベッキーの部屋（夜）

——眠っているベッキー。
ドアが開き、セーラが入って来る。
ベッドに近づくと、ベッキーを揺り起す。
セーラ「ベッキー……起きてよ……大変なのよ、ベッキー……」
ベッキー、ポケッと眼をさます。
ベッキー「あ、お嬢様……」
セーラ「ベッキー、起るのよ、早く」
ベッキー、ねぼけ顔で起上る。
ベッキー「で、でも、お嬢様、こんな夜中にお起きになってよろしいんですかあ?」
セーラ「病気ならもう大丈夫よ、それより、私の部屋へ来て。魔法が起ったのよ」
ベッキー「え? 魔法? ……お嬢様、夢を見てらっしゃるんですよ」
セーラ「本当なのよ、さ、来れば判るわ!」

ベッキー「お、お嬢様ってば……」
無理矢理手を引かれて、ドアへ——

32 同・屋根裏部屋（夜）

ドアが開き、セーラが眠そうな眼のベッキーを引き入れて来る。

セーラ「ね、驚いたでしょ。眼がさめたら、この通りだったのよ！」
無感動に、半眼で見廻すベッキー——その眼が次第に丸くなり、驚く。
突然、ベッキー、声を立てて笑い出す。

ベッキー「アハハハ……お嬢様、矢っ張り、夢を見てらっしゃるんですよ！」

セーラ「えッ……」
ベッキー、いきなり右手を大きく振ると、思い切り自

分の頬を叩く――

ベッキー「あいたッ！」

セーラ「べ、ベッキー……」

ベッキー「痛あ……」

殴った右手で頬をなで、その掌を改めて見直すと、部屋を見渡す。

ベッキー「ほ、ほんとでございます、お嬢様……こ、これは、夢なんかじゃないでございますよ」

セーラ「そうよ、きっと魔法なのよ……さ、魔法のごちそうを頂いてみましょうよ」

セーラ、テーブル掛けの机につく。

ベッキーは、持込まれていた折畳み椅子に茫然と坐る。

セーラ、蓋物からスープを皿に取り、ベッキーの前に置く。

セーラ「さ、どうぞ、ベッキー……魔法使いさんからの贈物よ」

ベッキー「魔、魔法使い……?」
セーラ、微笑で自分の皿にもつけると、
セーラ「さ、頂きましょう」
セーラ、おいしそうにスープを呑む――
セーラ「まあ、なんておいしいクリーム・スープなんでしょう」
ベッキー「お、お嬢様……」
セーラを見て、ゴクリと唾を呑んだベッキー、思い切ってスープを口に運ぶ。
忽ち、眼をまるくして叫ぶ――
ベッキー「ひゃあ……お嬢様、私、こんなおいしいスープは、はじめてでございます……こ、これは本当に、魔法使いの作ったスープでございますよ!」
セーラ「まあ、ベッキーったら……」

33 同・屋根の上(夜)

天窓からそっと窺っていたラム・ダス、微笑すると、

音もなく切れる――

34 クリスフォード家・居間（夜）

暖炉の前で――車椅子のクリスフォードが、微笑で頷く。

クリスフォード「そうか……隣りの屋根裏の少女が、それ程よろこんでくれたとは……はっはっは、魔法使いのごちそうか……」

はじめて、心から嬉しそうに笑い声を立てる。

前に、微笑で頷くラム・ダス――

クリスフォード「それにしても、ラム・ダス……彼女は、よくこれ程早く元気になってくれたものだね」

ラム・ダス「私も、不思議に思いました……或いは、病気を直した

のは、彼女自身の力だったのかも知れません」
クリスフォード「ほう……それはまた、どうしてだね」
ラム・ダス「私の見た所、あの少女は、悪い条件の中で働かされ、死ぬ程疲れ切っていたのだと思います……それが、倒れて、何日も寝込んだ結果、遂に若さが勝ち、生きる力を回復したのだと……」
クリスフォード「ふむ……お前の云う通りかも知れん……」
クリスフォード、じっと考え、口を開く。
クリスフォード「隣りの少女は、自分で自分の生きる力を取り戻した……ラム・ダス……この私も、彼女を見習うべきなのかも知れんな」
微笑で頷いてみせるラム・ダス――

35

ミンチン女学院・

テーブルで、食事を終るベッキーとセーラ――

ベッキー「フゥ……魔法のごちそうって、随分おなかが一杯になるもんでございますねえ」

セーラ「ウフフ……私も、おなか一杯……」

ベッキー「お嬢様……おなかが一杯になった途端に、なんだか眠くなって来ましたですねえ（トロンとなる）」

セーラ「まあ……それじゃ、今夜はここでやすむといいわ」

ベッキー「ええ？」

セーラ、席を立つとベッキーを抱え上げると、ベッドの方へ連れる。

セーラ「さ、ここなら暖炉の火もあるし、暖かい毛布もあるわ……」

眠そうに、ベッドに坐り込むベッキー、振返つつトロンと見廻す――

ベッキー「ほ、ほんとに夢じゃないんでございますねえ……あそこに、銀の燭台がある（指さす）……あそこにきれいな壁

かけ（指さす）……みんな、あしたの朝まで、消えませんように……」

ベッキー、パタンとベッドに倒れると、忽ち、イビキと共に深い眠りに陥入る。

セーラ「まあ……」

セーラ、そっとベッキーに毛布をかけ直してやると、改めて見廻す。

セーラのN「魔法なのかどうなのか、私には判りませんでした……でも、どこかの誰かが、そっと私を助けてくれようとしている事だけは、夢でも、幻でもなかったのです……」

おわり